

特別展「フィンレイソン展」開催中！



博物館では、特別展「創業200周年記念 フィンレイソン展 ～フィンランドの暮らしに愛され続けたテキスタイル～」を6月5日(日)まで開催しています。

本展開催までの道のりで大変だったのが、会場のレイアウト。大小さまざまな作品が250点以上あり、限られたスペースにたくさんの作品を展示しなければいけません。通路は、車いすの人も安全に通れるか、緊急時に非常口を使えるかなど、バリアフリーや防災面も考えることはもちろん、中にはプロジェクションマッピングを使った映像作品があり、どの位置に設置すれば

はっきりきれいに見えるかなど、いろいろな制約を解決できるように悩み、考えレイアウトしました。

観覧する皆さんに作品を楽しんでいただくための空間作りには、実はこんな工夫があるのです。

作品だけでなく、会場の雰囲気も楽しんでみてください。素敵なデザインとともにお待ちしております。



ライナ・コスケラ作「エレファンティ(象)」
寝具用生地 (1969年) / タンペレ歴史博物館所蔵
Finlayson ® © Finlayson Oy

☎ 博物館・プラネタリウム (TEL) 355-2700 (FAX) 355-2704

近代萬古焼の祖 山中忠左衛門

萬古焼といえば、紫泥急須や土鍋、近年人気の高いご飯鍋など食生活に彩りを与えるものが思い浮かびます。萬古焼そのものは江戸時代後期の茶陶から始まりますが、現在の萬古焼の礎を作ったのが山中忠左衛門でした。

忠左衛門は、幕末、末永村（現在の川原町付近）の住民の困窮や失業者の増加を憂え、彼らの救済のため製陶の研究や修練を重ねました。そして明治3年（1870）ごろに、水車村（現在の浜一色町）に窯を築いて住民に仕事を与え、彼らの暮らしを助けました。

その後、四日市には次々と製陶業を営む者や名工が現れました。

忠左衛門の窯で焼かれた製品の多くは「山中製」や「一左楽」と捺されています。海外への輸出を視野に入れた作品が多く、ユニークな形や模様で見る者を楽しませます。

忠左衛門は今は陶栄町の萬古神社にまつられ、萬古焼の発展を見守っています。



ねりこみはずがたつる
練込蓮形鶴絵コーヒーカップ (山中窯製)
(四日市市立博物館所蔵)

☎ 文化課 (TEL) 354-8239 (FAX) 354-4873